

すな たう ばぬま 砂田姥沼遺跡

— 宇都宮市砂田町地内—

砂田姥沼遺跡は、宇都宮市の南東部、鬼怒川と田川の間南北にのびる低い台地上にあります。発掘調査は、「インターパーク宇都宮南」の土地区画整理事業に先立ち、平成10年度と17年度に実施しました。調査した場所は、現在の中央公園の東側300mあたりです。

発掘調査では、古墳時代から平安時代にかけてのたくさんの^{たてあなじゅうきょあと} 竪穴住居跡や^{ほったてばしらたてもものあと} 掘立柱建物跡のほか、井戸・^{どこう} 土坑・溝跡などが発見されました。また、これらの遺構からは、土器（^{はじき} 土師器・^{すえき} 須恵器）や鉄器（^{やじり} 鏃・^{とうす} 刀子）・^{といし} 砥石・^{ぼうすいしゃ} 紡錘車・^{まがたま} 勾玉などが出土しています。

注目されるのは、古墳時代の始まりの頃の竪穴住居跡が2軒発見されたことです。これまで「インターパーク宇都宮南」地内では、古墳時代から平安時代の竪穴住居跡を1,000軒ほど調査しましたが、古墳時代の始まりまで遡る竪穴住居跡の発見は初めてです。また、このうちの1軒は、古墳時代の土器（土師器）と一緒に弥生土器が出土しました。このほか、古墳時代の終わり頃から奈良時代のムラの中を流れる水路を行き来する通路状遺構なども発見されています。



上空から見たインターパーク宇都宮南（上が北）



水路と通路状遺構